国語科

物語世界へ入り、自ら読み進める子どもを育む国語科授業

～「読む」以外の入り口から始まる宮沢賢治作品の実践を通して～

三条市立嵐南小学校
田中 雅人（令和元年度）

（主張）

物語を「読ませる」前に、子どもが「読みたい」と思える入り口をつくることが、自ら読み進める学びの出発点になると考える。自学級には、物語への関心が低く、読むことに抵抗感を示す児童が多かった。また、教師の問いには取り組むものの、自ら疑問をもち、叙述に立ち返って解釈する姿は十分ではなかった。

そこで、宮沢賢治作品を教材に、「読む」以外の物語世界への入り口を工夫した。５年生の「注文の多い料理店」では、料理店の戸や児童の考えを生かした掲示を設け、そこで生まれた疑問を、叙述の読み直しや友達との対話につなげた。６年生の「銀河鉄道の夜」では、星の学習や七夕などの身近な実体験を入り口とし、物語の「本当の幸せ」を考える学習から、自分の生活を捉え直す学習へとつないだ。

実践を通して、疑問を確かめようと自ら叙述を読む姿や、登場人物の心情に加え、作者の描き方や読者への伝わり方に目を向け、解釈を捉え直す姿が見られた。また、「よだかの星」「やまなし」を教材にした実践でも、獲得した読みの視点を生かす児童が見られた。

入り口の工夫を、児童自身の疑問と叙述に基づく学びへつなぐことを大切にしたい。本発表では、その具体的な手立てと児童の姿を共有し、解釈と叙述の結び付きを確かめる指導など、今後の授業改善について考える。